スポーツ・コンプライアンス教育の充実に向けた情報発信企画の第１弾は、スポーツ・コンプライアンス・オフィサー（SCO）の山本 繁先生。９月に岩手県スケート連盟の研修会で、小学生から大学生までの指導者を中心にご講演された内容をもとにお話いただいた。

Ⅰ．スポーツ・インテグリティ

―― スポーツは『文化』である

山本 繁
岩手県文化スポーツ部スポーツ振興課　専任スーパーバイザー
スポーツ・コンプライアンス・オフィサー

指導者に伝えたい３つのメッセージ

私がスポーツ･インテグリティを始めるきっかけは、40 年間教員として子どもとかかわってきて、選手や子どもたちの健全な成長のためには、どうすればいいのかということを本気で考えたからです。

まずは、スポーツが人生を豊かにする素晴らしいものであることをきちっと指導者の方に理解していただきたいと思っています。また、指導者や教員の社会的地位を守るということも大事です。ちょっとしたトラブルやちょっとした暴言を吐いたがために、本当に苦しまれている若い指導者がたくさんいると思うので、そうならないための知識をしっかりもつことで自分自身を守ることも学んでいただきたいと考えています。つまり

①選手を守る

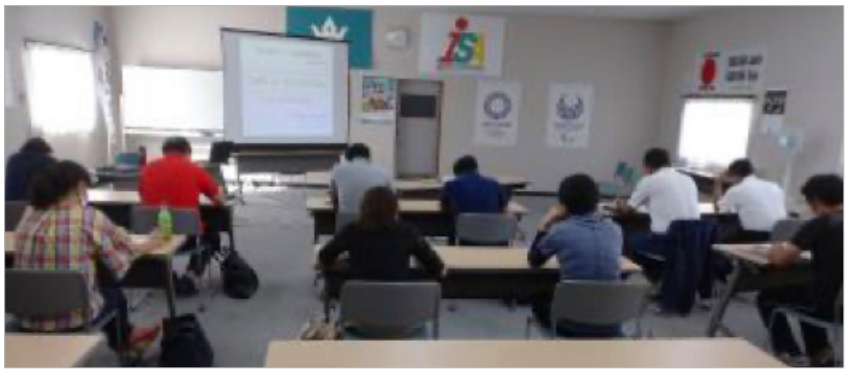
②スポーツの価値を守る

③指導者を守る

この３つをメッセージとして皆さんにお伝えしたいと思っています。

では、実際にどうすればいいのか。それは指導者の「意識改革」と「自己変革」しかないと思っています。我々大人や指導者は、実はスポーツや子どものからだのことを知っているようで知らないまま、今までの経験だけでなんとなく指導しているということが多いと思います。

指導者自身が、「実は知らなかったんだ、だからやっ



岩手県スケート連盟　スポーツ・インテグリティ研修会（2020.9.19）

ぱりもっと勉強しよう」とか、「研修を受けよう」とか、「コーチングを学ぼう」とか、そういう気持ちになって、自分を高めるきっかけにして、しっかりとした自分自身をつくっていただきたいと願っています。

そのために、一番大事なことは、教育の目的をしっかり捉えてほしいということです。堅苦しい話かと思われますが、実は教員自身も、保護者の方もあまりよく理解されていないことかと思います。

教育の目的は「選手の自立と人格の完成」です。人格の完成についてはかなり難しい問題になってきますので、まずは「自立した青年（選手）に育てよう」ということを心がけて、子どもや選手を指導してほしいのです。

自分が“知らない”ということを自覚しよう

指導者のレベルアップを図るためには「指導技術」と「人間力」が不可欠です。まず、人間力をアップするためには、自分は知らないことが多いということをまず自覚することから始めましょう。

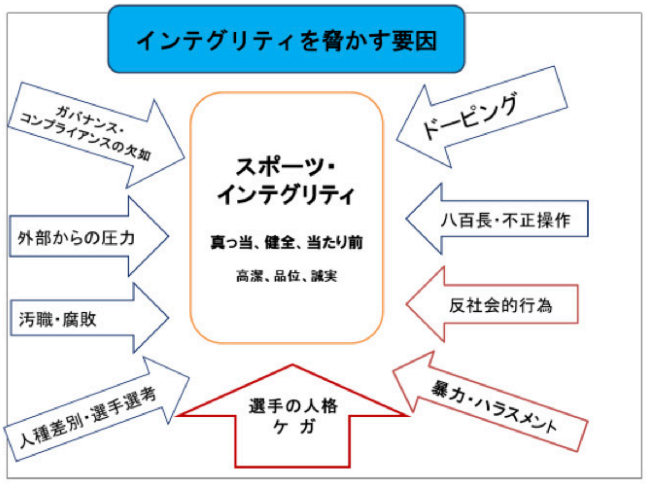
突然ですが、

Q１　みなさん、人の骨の数は何個あるでしょうか？

Q２　子どもの骨の数は何個あるでしょうか？

Q３　大人と子ども、どちらの骨が柔らかいでしょうか？

みなさん答えられましたか？



そのほかにも、「筋肉は骨にどうくっついているのか？」「骨はどの部分が成長するのか？」「骨の成長の材料はなにか？」。

みなさん答えられますか？

このほかにも指導者として知っておいてほしい知識はたくさんあります。少しでも「自分は知らない」ということに気づくと、もっと学びたいという意欲につながり、指導者としてレベルアップにつながるのではないかと思っています。

まずは、自分を知ることが大事です。

※答えは、Q１：206 個、Q２：約 300 ～ 350 個、Q３：子どもの骨が柔らかい。

スポーツ・コンプライアンスについて考える

私は、いつも研修会の最初にアンケートをとり、どのようなことが課題となっているのか、まず現場の身近な問題に関して解決を図っていくようにしています。

これまで 13 回ほど研修を行っていますが、一番多く聞かれる課題が「古い体質」「古い指導法」、それから「生徒の行動・態度」「暴言」「過度の練習」が挙げられます。

まず現場で起こるさまざまな問題を解決するためには、日本協会がすること、地方協会がすること、現場

のチームをもっている先生たちがすること、指導者一人一人がすることに分けて考えていくとよいでしょう。

ここでは、指導者のみなさんに私の考える解決方法をお伝えします。

①ハラスメント

暴力や体罰は実際に少なくなってきていると思います。ただ、暴言については、私自身、いろいろな大会を見に行くようにしているのですが、試合の予選はいいのですが、県大会の決勝や全国大会の出場権がかかっているといった大会では、監督も保護者の方たちもかなり熱くなり、選手たちに辛辣な言葉をかけてしまっています。当たり前のように大声で怒鳴ったり、相手チームをけなすようなことを言ったりしている現場を見ると、暴言はまだまだなくならず、さらなる徹底した啓発活動をしていかなければと思っています。

そこで私たちは資料をつくり、暴言をなくすために次のような取り組みを行っています。

たとえば資料では「あなたにとって、指導者として教育者として、譲れないこだわりはありますか？」と聞いています。このなかで本当に「譲れないもの」と「譲れるもの」、それから「選手からそういった『譲れない』態度が出たときには、怒る言葉の準備を決めていますか？」「何を言いますか？」。こうした問いかけを行うことで、自分の怒りに対して、自己分析ができる指導者になっていただきたいと考えています。

ここで出てくる指導者たちの譲れないものは何かというと、「指導して言ったことを何回も何回も間違える」とか、「教えてもできない」といったことがあげられています。

もう一つの譲れないものは、選手の態度に関してです。ポケットに手を突っ込んだままでいるとか、話を聴いていない、などがあげられます。

実は、今あげた点だけでなく、それぞれ指導者は自分の譲れないこだわりがあることも理解しています。私であれば、私が話しているときに私語をしている選手には注意しますし、それぞれ個々の指導者によって琴線に触れる部分は違ってきます。そこをまず指導者本人が自覚することが大事です。

もちろん子どもたちを褒めて育てることが理想ですが、現実はそれだけではうまくいかないことがあると思います。実際に怒りが生じたときにどうすればいいのか、アンガーマネジメントについて是非、学んでいただきたいと思っています。そのほかペップトークやコーチングなど、さまざまな方法がありますから是非自分にあったものを学んでください。そういうテクニックを学びながら、たとえばカーっとなったら６秒間待つなど、自分の手法をちゃんともつことが大事です。

②アンチドーピング

ドーピングについては、研修会では、事例問題を実際にあげて指導者のみなさんに考えいただくようにしています。たとえば「先輩から海外のサプリメントをすすめられたらどうするか」といったことです。

現場の指導者もサプリメントの知識はあまり詳しくないのが現状です。岩手県の場合はアンチドーピング教育に関してはファーマシストさんが研修事業を担当し、指導者の方々に学んでもらうようにしています。

しかし、子どものうちからドリンクやサプリメントを飲まされている子どもたちが非常に多いことに驚かされます。ドーピングの入り口をつくっているように見受けられます。実は、小学校の校長をやっていたときに、スポーツ少年団の子どもたちと話をしていく過程で、子どもたちから、サプリメントやドリンクを飲んでいるという話が出ました。私が、小学生のうちからそんなにサプリメントを飲んではダメなんだぞと言うと「校長先生、もう今のスポーツはそんな時代じゃないんですよ」と保護者も子どもも私に対して真顔で言うくらいですから、ある意味、リスクのある薬を飲むといったハードルが小学校のうちから下がっていると言えます。ですから、指導者のみなさんには選手たちに正しいアンチドーピング教育ができるように学んでほしいと思っています。

③保護者と選手（子ども）とのかかわり方、保護者と指導者のかかわり方

一番は信頼関係です。保護者や選手たちから信頼を得るためには指導者は日々勉強することです。自分自身の指導技術も年々高まっていますというアピールのためにも研修などで学び、それによって自分のスキルアップを図り、「私を信頼してお任せください」と言える信頼関係を築かないといけないと思います。旧態依然のことを毎年同じようにやっていたのではだんだんと信頼がなくなっていきます。

教員をやっていたときに親や子ども自身から「僕は褒められて育つので、よろしくお願い致します」とよく言われました。（笑）

今の子どもたちは、カチンとくることも平気で言いますから、本当に関係性はむずかしいと思います。やはり指導者自身が、そういうことも含めて大きな気持

ちでどんどん変わっていって、指導ができないとやはりうまくいかないと思います。

保護者の方との関係で一番問題としてあげられるのは選手選考に関してです。リレーの選手は誰にするのか、テニスなどでは誰と組むのか、うちの子が外されるのではないかとか、そういったことでは、保護者とのトラブルは多いという話をよく聞きます。難しい問題ではありますが、先ほども言いましたが、説明責任や透明性をはっきりさせるという時代なんだと思っています。

保護者と子どもとの関係においては、教育の目的は「子どもの自立」ですから、私もチームをもっていますが「自分でやることは自分でやりなさい」「親御さんはなるべく見守ることにしてください」「親のほうから何かをしてあげることはしないでください」と話します。だだし、コミュニケーションはよくとってくださいと言います。積極的に夕食の場などで子どもと会話をしてほしいと思っています。

いずれ、問題を起こさないために大事なことは、「選手（生徒）との信頼関係」「親との信頼関係」「指導者同士の信頼関係」、さらに「チームとしての透明性と説明責任」「他者の気持ちで物事を考える」ことだと考えています。

この「信頼」「透明性」「他者の気持ちで考える」といった、この３つのキーワードが課題解決に大切になってきます。

選手の自立を促す『運動有能感』と『よりハイレベルな楽しさ』

私は、指導者にも保護者の方にも、選手の自立を考えた指導を行ってほしいと思っています。では実際に「自立」に向けて、どのようなことを行えばいいのかというと、選手たちに次の２つのことを与えてほしいと思っています。

１つは「運動有能感」です。「オレはできるんだぞ！」「頑張ればやれるんだ！」、「みんなと一緒に頑張ればできるんだ」「みんなに認められている」と自信をもたせることです。

「運動有能感をもたせる」ということは、良いプレーをしたときにはただ褒めるのではなく、具体的にここが良かったというように、しっかりと何が良かったのかをはっきり伝えるようにします。

さらにできないことができるようになるためには、基礎が大事ですから、基礎をしっかり教えながらやっていくのですが、そこでも、できる子もできない子もたくさんいますので、個別指導が大事になります。そこでも個々のレベルにあった有能感をもたせることが大切です。

２つめは、『よりハイレベルな楽しさ』を味わわせるために、より高度な練習やトレーニングや指導を行うことです。そうすると向上心ややる気にスイッチが入り、より難しいことに挑戦していこうとします。そこに克服や達成感が生まれ、仲間で喜び、分かち合うといった成功体験につながります。指導者はそういうハイレベルな楽しさを提供して、どんどん成功体験を積み上げていかなければなりません。

そのためにはやはり、自分自身が勉強して研鑽を積んで、指導者としてレベルアップをしていかなければいけないのです。

誠意をもって、本気で指導していきましょう！

Ⅱ．スポーツ・コンプライアンス・オフィサーとしての活動

スポーツ界のコンプライアンスの徹底を図り、スポーツの価値と力を守り育むための教育・啓発活動を担う専門的人材を養成することを目的とした「スポーツ・コンプライアンス･オフィサー養成講座」を受講され、現在、スポーツ・コンプライアンス・オフィサーとして活動されている山本先生に、養成講座について、さらには今後の活動の抱負など聞いた。

――なぜスポーツ・コンプライアンス・オフィサー養成講習会を受講しようと思ったのですか？

退職するまで 40 年間教員をやってきて、スポーツでケガをしてスポーツをしなくなった子どもが実に多いと思っていました。また､スポーツ少年団や中学校、高校の部活を見ていて、ちょっと勝利至上主義に陥っているように感じ、そこでは古い体質、古い指導がまかり通っていました。

岩手県では、高校生の自殺もあり、スポーツ・コンプライアンスの重大事案が大きな社会問題となっております。そういう悲しい事件を含めて、子どもたちのために、きちっとした指導者を育成していきたいという思いがありましたので、今回、スポーツ・コンプライアンス・オフィサー養成講座の講習を受けることにしました。

ちょうど武藤芳照先生（一般社団法人スポーツ・コ

ンプライアンス教育振興機構代表理事）が講演にいらしたときに、養成講座のご紹介いただいたことがきっかけです。

今回、岩手県からはスポーツドクターと私の２名が受講しましたが、実際に受講してみて良かった点の１つは、弁護士、オリンピック選手やトップアスリート、大学教員やジャーナリスト、国内競技連盟（ＮＦ）といった、各専門家のみなさんのお話をリアルに聞くことができたことです。いろいろと多様なお話をしてくださり、さらには質問もでき、疑問に思っていたことも深く知ることができましたので、非常に勉強になりました。

講座のプログラムのなかにグループワークもありましたので、全国から集まった受講生同士、和気あいあいとさまざまな事例について議論し学ぶことができました。

もうひとつは最終日の修了テストです。修了証が交付されるということが、いい意味での緊張感を生みました。（全員合格！）修了証をいただいたことで励みになりますし、責任感や自負をもって今後の取り組みにもつながる、いい機会だったと思います。

――岩手県のスポーツの現状と取り組みについて教えてください。

岩手県のスポーツの現状はかなり二極化していると言わざるを得ない状況です。親も含めてスポーツを一緒にやるようなスポーツに熱心な子どもと、まったく運動やスポーツをしないという子どもの二極化になっています。

岩手県の子どもたちの抱える問題のひとつに肥満があります。運動をしない子どもたちはどんどん太っていく一方、スポーツをやる子たちはどんどんハードになってしまうといった問題もあります。そうした二極化も顕著にみられます。

基本的には岩手県の子どもたちは、まじめで素直。スポーツをしたいという子が多くいますし、中学校の部活動は全員加入としているところが多いので、スポーツに親しんでいる子どもたちは多いです。

☆　その前に、耳より情報を

☆1　スポーツ少年団の現状（2014年度）

岩手県小学生の加入率
全国9．8%　岩手県26．0%　第3位

近年の増減率　全国の小学生総数　91．2%
スポ少の増減率　全国79．4%　岩手県83．8%

☆2　中学校部活動の現状（2017年度）

中学生の加入率　全国67．7%　岩手県81．5%　☆第1位
男子4位　女子1位　圧倒的人気！！

岩手県は、**スポーツ**をしたい子供達が、
まだまだ**いっぱい**いる！！

そこで私たちスポーツ振興課では、指導の方向性として以下の３つのポイントをあげて活動しています。

①正しい姿勢でスポーツを行うこと。正しい生活習慣でスポーツ活動をすること。

②ケガのない身体づくりをするためにも正しい動きやトレーニングの方法を行うこと。

③最新のトレーニングを提供し、それを選手にかみ砕いた形でわかりやすく説明する。

岩手県は、野球に代表されますが、大谷翔平選手（ロサンゼルス・エンゼルス）や菊池雄星選手（シアトル・マリナーズ）の２名のメジャーリーガーを輩出していますし、佐々木朗希選手（千葉・ロッテ）もいます。スキージャンプでも、2018/2019 シーズンに 13 勝をあげて、日本人初の総合チャンピオン（ヨーロッパ選手以外で初）になった小林陵侑選手（土屋ホーム）、スノーボードではワールドカップのビッグエアで優勝している岩渕麗楽選手、スポーツクライミングの伊藤ふたば選手（デンソー岩手）というように世界で活躍している選手がたくさんいます。

スポーツが好きな子、もともと身体能力が高い子たちが、まだまだ岩手県にはたくさんいるんだろうと思っています。

――実際に今回、先生のスポーツ・インテグリティ講習を受けた指導者の感想はどのようなものだったでしょうか？

受講した指導者からは、気づかないところを気づかされたという話や自分が今まで当たり前にやってきたことを立ち止まって再確認することができたと言われます。選手に対してついついキツい声が出てしまうことがあるかと思いますが、自分では暴言だと思っていなかったが、言われたほうは暴言と受け取ることがあるということを再確認し、自分の言動を直さなければいけないと思ったという話を聞きました。

――今後はどのようにスポーツ・コンプライアンスを広めていきたいと考えていますか？

岩手県内の市町村に出向いて、スポーツ・コンプライアンスを広めていくために、スポーツ・インテグリティ研修を開催するように市町村担当者と話を進めています。今年も県の種目協会に所属する４団体からも研修の依頼が来ており、県民みなさんの関心の高さを感じています。岩手県体育協会も開催補助事業をしています。

私は現在、岩手県スポーツ振興課スポーツ医・科学班に所属しておりますが、そこで目指しているものは、以下の４つです。

1. ケガをしない身体づくり
2. 競技力向上
3. 充実したスポーツ活動
4. 正しい生活習慣

公認スポーツ栄養士、メンタルトレーニング専門家、ドーピング専門のファーマシストの方とも一緒にいろいろな取り組みを行っています。また、ケガのない身体づくりが競技力向上につながると捉えて、スポーツドクターたちと一緒に取り組みをしています。

さらに、人材育成も大事な取り組みと考えておりますので、若手指導者・女性指導者の育成、若手レフェリーの育成、その種目専門の若手・女性トレーナーの育成を進めていきたいと考えております。

【メモ】
岩手県ＨＰ（スポーツ・健康）
https://www.pref.iwate.jp/kyouikubunka/sports/index.html
※スポーツ医・科学サポート特設ページ：「レッツ！ぺっこトレ‼」動画配信中
https://www.pref.iwate.jp/kyouikubunka/sports/1007379/1029950.html

山本　繁（やまもと・しげる

1957 年岩手県釜石市生まれ。1980 年横浜国立大学教育学部教育学科卒業、岩手県盛岡市立青山小学校教諭、1982 年岩手大学教育学部附属小学校教諭、1995 年岩手県教育委員会指導主事（久慈、水沢）、2001 年田野畑村立島越、盛岡玉山、盛岡大慈寺小学校教頭、2009 年岩泉二升石、釜石甲子、盛岡青山小学校長、2017 年定年退職、2018 年より岩手県文化スポーツ部スポーツ振興課。
専門分野：体育授業研究、ハンドボール、Jr スポーツ指導、健康指導。
役職：（公財）日本学校体育研究連合会評議員、いわてスーパーキッズ発掘育成事業プロジェクト委員、岩手県体育協会スポーツ医・科学委員会、（公財）日本ハンドボール協会参事普及委員長、NTS U-12 東北ブロック技術委員長、岩手大学教育学部保健体育科非常勤講師。

一般社団法人スポーツ・コンプライアンス教育振興機構からのお知らせ
http://www.spo-com.org/